

身土不二について
しんどふに

——中国天台の『維摩経』注釈書を通して——

山
野
俊
郎

目次

はじめに

一 天台の四種浄土説

(1) 中国天台の『維摩経』注釈書

(2) 『維摩経』の「宗」(根本テーマ)

(3) 四種浄土説

(4) 浄土の意義

二 身土不二

(1) 「常寂光土」の釈文より

(2) 『維摩経』「仏国品」の文より

(3) 『維摩経』「問疾品」の文より

おわりに

はじめに

「身土不二」の問題は、とくに「浄土」（仏土・仏国土）という課題に関連して論じられる。「身土」の「身」とは、仏の身（仏身）あるいは衆生の身をいう。また「土」（居住の場）とは「浄土」のことであり、仏の土（仏土）とともに衆生の土を意味する。この身と土とが、不二一体の関係にあることを示す「身土不二」は、後述するように、本来きわめて宗教的な概念である。

まず、「身土不二」についての一般的な解釈を示せば、次の通りである。身体をもって生きる衆生という存在（これを「身」という語で表す）は、それを支える大地―環境世界（浄土）―から切り離して考えることはできない。逆に、環境世界もまた、一人ひとりの衆生と無関係に存在しているのではない。なぜなら、仏教の考え方によれば、一人ひとりの衆生が感得する世界は、衆生それぞれの機根（宗教的な素質・能力）の異なりに応じて、仏が建立したものである。つまり「浄土」とは、衆生自身の機根のあり方に応じて、さまざまに異なった相として顕現された世界であり、そこにおいて衆生の成長（機の成熟）と救済（成仏）が実現されていく。

その意味で、衆生が感得する世界は、衆生それぞれの機根のあり方から切り離して考えることはできない。そのような衆生（身）とその世界（土）との不離一如の関係を「身土不二」と呼ぶのである。

一方、仏教用語としての「身土不二」とは別に、農業や農業振興政策、食生活、健康などにかかわる「身土不二」（この場合は「しんどぶじ」と読む）という言葉が一般に用いられている。ここにいる「身」とはひとの身体や健康、また「土」とは土壌や地元で育った農作物（穀物、野菜、山菜など）を意味する。この「身土不二」は、地元で育った食べ物をたべると身体によく、他の地域の食料は健康を損なうと主張し、「地産地消」「地域自給」を勧める考え方である。つまり、ひとの身体・健康（身）と地元産出の食料（土）との密接不離の関係を「身土不二」と表現する。

なお、そのような意味での「身土不二」という言葉を最初につかつたのは、陸軍の西端学大佐であったという。明治三十年代に陸軍薬劑官の石塚左玄は、「日本と日本人とに適當せる正しき食物の伝統」を探求し、食養主義運動をおこしたが、その信奉者であつた西端は「食養道」を「身土不二の原則」と名づけたとされる。^①また、「身土不二」という考え方の源が仏教にあるとし、その典拠を仏教の古典に求めるといふ試みもなされてきている。^②

そこで本稿においては、中国天台宗の『維摩經』注釈書を通して、「身土不二」の出典をさぐるとともに、その言葉がどのような文脈で用いられているかを検討したい。とくに『維摩經』をとりあげたのは、その第一章「仏国品」で「仏土」（浄土）がテーマとして取りあげられ、「身土」の関係が論じられているからである。

一 天台の四種浄土説

ここでは、まず本稿で用いる『維摩經』注釈書について説明する。次に天台の教説によりながら、この經の「宗」（根本テーマ）が「仏国土」（浄土）であることを述べ、さらに四種浄土説を通して、天台の「浄土」についての基本的な理解を見てみる。

（1）中国天台の『維摩經』注釈書

本稿で使用する注釈書は、①中国天台宗の開祖天台智顛（五三八～五九七）撰『維摩經玄疏』六卷、②智顛撰『維摩經文疏』二八卷、③智顛撰・六祖湛然（七一～七八）略『維摩經略疏』十卷、④湛然撰『維摩經疏記』三卷、⑤孤山智円（九七六～一〇二二）撰『維摩經略疏垂裕記』十卷、である。このうち、①は天台独自の經典解釈法である五重玄義によって、本經の内容を名・体・宗・用・教の五つの側面から分析したもの。②は本經の經文をとりあげ解釈を加えたもの。③は智顛の『文疏』二八卷を、湛然が削略して十卷本にしたものであるが、本稿では、『略疏』の釈

文は智顛自身のものとして扱う。④は智顛の『文疏』から要文だけをとりあげ解釈を施したものの。そして、⑤は湛然の『略疏』にたいする注釈書である。著者の智円は天台宗山外派の代表的な学僧であり、本書は山外派の浄土観を明かす文献としても注目される。

なお、以下、①～⑤の注釈書をそれぞれ『玄疏』『文疏』『略疏』『疏記』『略疏垂裕記』と略記した場合もある。

(2) 『維摩経』の「宗」(根本テーマ)

「宗」とは、智顛によれば、「体を顕^{あらわ}すための要蹊^④」であり、また「理に入るための綱宗^⑤」である。仏教の究極義——実相・真如・解脱・仏性などと表現される——を「体」あるいは「理」と呼ぶが、「宗」とはその「体」に至るための大切な道(要蹊)のことであり、また「理」に入るための根本の方途(綱宗)をいう。このように「宗」は、究極の真理に至るための実践的な側面をあらわす概念である。智顛の『維摩経玄疏』に、

「体」は独り到らず、これを求むるに方「途」あり。行に涉^{わた}り因を修して、然る後に「仏」果に致る。故に「仏国の因果」をもって入理の綱宗と為す。[※]

(大正三八・四一六—A)[※]

※ 語句を説明したり、強調するため、あるいは語句を補うために、引用文中にそれぞれ()や「」などを入れた場合もある。以下の引用文についても同様である。

※ 出典をしめす表示であり、この場合、大正大藏経第三八卷・四一六頁・上段を意味する。

とあるように、『維摩経』の「宗」は「仏国の因果」である。「仏国」すなわち「浄土」を実現するための修行(因)と、その結果実現された浄土のありよう(果)を説き明かすのが、この経の根本テーマであるとされる。そして、この経全体を通して「仏国の因果」が説示され闡揚されており、「浄土」がこの経全体を一貫する主題であるという。

(3) 四種浄土説

智顛は『維摩經文疏』卷一・六・十九などで四種の浄土について詳説しており、四土説はその後の天台浄土教において、常に基本的な教説として依用されてきた。いま『略疏』卷一の記述によれば、まず「仏国」（浄土）という名称について、次のように定義する。

仏の居「住」する所の域なるが故に「仏国」と名づく。（中略）仏は有縁うゑん「の衆生」と共に居「住」すと雖も、しかも仏に従つて名を受けて「某仏の国」と名づく。仏身の依る所なるが故に「仏土」と名づく。仏の「居」住したもう界分なれば「仏世界」と名づく。仏の居止したもう所は万境にして同じからざれば、また名づけて「仏」刹しやくと為す。

（大正・三八・五六四—A）

仏国、仏世界、仏土、仏刹、あるいは浄土など種々な呼び名があるが、いずれも仏が衆生と共に居住する世界であり、そこでは常に、仏・菩薩による衆生の教化・救済の活動が展開される。さらに四種の浄土について、まず

仏国を明かさば、諸仏が物（衆生）を利「益」する差別の相は、無量無辺なり。今略して四「土」と為す。

（大正三八・五六四—A—B）

と述べ、仏が衆生を救済する方法や領域には無量の異なりがあるが、略して仮に四つの領域に区分するという。それが四種浄土であり、それぞれ、①凡聖同居土ぼんしょうどうじよ（染浄土）、②方便有余土ほうべんゆうよ（有余国）、③実報無障礙土じつじやうむじやうげ（果報国）、④常寂光土じやうじやくこうど（寂光土）と名づける。

簡潔に述べれば、①は凡夫と聖人（小乗仏教の修行者など）が共に居住する領域をいう。これに浄土と穢土の二種があるとされ、我われが住む娑婆世界という苦域を「凡聖同居穢土」、阿弥陀仏が主宰する西方極樂浄土を「凡聖同居浄土」と呼ぶ。②は悟りを開いた阿羅漢（小乗仏教における最高位にある修行者）などが往く浄土である。③は無明の煩惱を断ち、真実の果報である法性身をえた菩薩が居住する浄土である。そして、究極の浄土のあり方を示すの

が④の常寂光土である。

常寂光土はただ仏だけが居住する浄土である。智顛の『維摩經文疏』（『維摩經略疏』も同様）においては、「身土不二」という命題は、四種浄土のうち常寂光土との関連で語られる。そこで、この浄土について更に詳しく見ておきたい。『略疏』巻一によれば、

「寂光土」を明かさば、妙覺の極智所照の如如法界の理、これを名づけて国（仏国土）と為す。ただ大乘の法性は即ちこれ真寂の智性なり。二乗の偏眞の理に同じからず。（中略）不思議の極智の居「住」する所なるが故に「寂光〔土〕」と云い、また「法性土」と名づく。

（大正・三八・五六五—A）

と説明される。つまり、仏の究極の智慧（「極智」）によって悟られた真理（「如如法界の理」）そのものを「寂光土」と呼び、あるいは仏の純粹な智慧（「妙覺の極智」）がはたらく場を「寂光土」と名づけるのである、という。『略疏』ではこれに続いて、

ただ真如仏性は、身にあらず土にあらずして而も身土と説く。身を離れて土なく、土を離れて身なし。

（同前）

と説くが、この部分は、後述するように「身土不二」の典拠とされる。

智顛はまた「常寂光土」の典故として、『普賢觀經』の次の經文を提示する。

釈迦牟尼「仏」を毘盧遮那遍一切処と名づく、その仏の住処を常寂光「土」と名づく。

（大正・九・三九二—C）

一般に、仏（仏身）を応身・報身・法身の三種に分け、三身（仏の三種の身体）とよぶ。このうち、「応身」とは、衆生の機根に応じてさまざまな姿を顯す仏であり、たとえばこの娑婆世界の教主である釈迦をいう。また、法（真理）そのものを仏の本質と考え、いわば法（真理）を身体とする仏を立て、これを「法身」と称する。たとえば常寂

光土の毘盧遮那仏がこれにあたる。右の経文によれば、応身の釈迦仏がそのまま一切の空間に遍在する法身の毘盧遮那仏と同一であり、また我われの娑婆世界がそのまま常寂光土である、と示される。この「娑婆即寂光」——我われの迷い苦しみの現実世界（娑婆）が、そのまま究極の浄土（常寂光土）である——というような不可思議な論理が成り立つ場こそが、毘盧遮那仏の常寂光土である。

（4） 浄土の意義

苦域としての娑婆（「土」）は、「火宅無常の世界」であり、またそこに居住する我われ衆生（「身」）は「煩惱具足の凡夫」^⑥と表現される。前述したように、下はこの娑婆世界（「凡聖同居土」）から、上は究極の浄土である常寂光土まで、浄土を四段階に分類するが、智顛は四種浄土の意義をどのように考えていたのだろうか。そもそも衆生にとつて「浄土」はどのような意味をもつのか。「浄土」が建立される理由と目的は、どのように説明されるのであろうか。『維摩経』『仏国品』によれば、「仏国土の清浄」（仏国土の清浄なるさま）と、「菩薩の浄土の行」（菩薩にとつての浄土建立の修行）について質問された仏は、次のように答える。

衆生の類、これ菩薩の仏土なり。所以は何ん。^{ゆえん}①菩薩は所化の衆生に随つて仏土を取る。②調伏する所の衆生に随つて仏土を取る。③諸の衆生の、何れの国（仏国土）を以て仏の智慧に入るべきやに随つて仏土を取る。④諸の衆生の、何れの国を以て菩薩の根を起こすべきやに随つて仏土を取る。

（大正一四・五三八—A）

仏や菩薩が浄土（仏土）を建立するのは、あくまでも衆生のためであり、衆生の救済——究極的には「成仏」ということ——が、さまざまな浄土が建設されるための前提条件である、とされる。つまり、衆生を教化し、最終的には仏の智慧にみちびき、究極的な悟りを得て、「常寂光土」に生まれしめる。これが浄土建立の唯一の理由であり、目的である。衆生の成熟——仏教の用語でいえば「機の成熟」——ということを離れて、浄土は存在しえない。そして、そのよう

な浄土建立の根底にあるのが、仏・菩薩の慈悲の心であり、智慧の力である。その意味で「浄土」とは、いわば仏・菩薩の慈悲と智慧のはたらきに覆われた世界である。

『維摩経略疏』によれば、引用文の①―④にいう「仏土」は、それぞれ四種浄土の「凡聖同居土」「方便有余土」「実報無障礙土」「常寂光土」に対応するとされる。その解釈にしたがえば、「凡聖同居（穢）土」に居住する迷苦の凡夫が、仏・菩薩の教化を被ることによって、空の智慧をさとり（凡聖同居から方便有余土へ）、やがて菩薩の深い境涯にめざめ（方便有余土から実報無障礙土へ）、そして終には仏と同等の智慧を体得し、「仏に成る」に至る（実報無障礙土から常寂光土へ）。そのような衆生の修行のプロセス、あるいは仏・菩薩による衆生教化のプロセスが、四種浄土説によって示されるのである。言いかえれば、衆生の側の「機の成熟」（智慧の深まり）に応じて、より高次の浄土が顕現されてゆき、終には衆生を「常寂光土」の往生へと導いていく。天台の解釈に従えば、浄土（四種浄土）の意義は以上のようにまとめることができるだろう。

ちなみに、『略疏』の引用文の①「凡聖同居土」について、智円は『略疏垂裕記』巻一で次のように解釈している。

「凡聖」同居土とは、界内の具縛「の凡夫」は未だ真理を見ず。心神は動散し、善悪は定まりなし。菩薩は方便をもって、其の「機の」生なまと熟とを観る。生なれば則ち「凡聖同居」穢「土」を用い、熟なれば則ち「凡聖同居」浄「土」を用う。

（大正三八・七一九―B）

ここでは菩薩が、衆生の「機の成熟」のあり方―未成熟（「生」）であるか、成熟（「熟」）しているか―に応じて、とも適切な浄土を顕現する、ということが語られている。

二 身土不二

ここでは、天台系の『維摩経』注釈書にみえる「身土不二」の語について考える。以下、まず「常寂光土」の釈文

を検討し、次いで『維摩経』の「仏国品」と「問疾品」から二つの文をとりあげ、その解釈をみてみる。

(1) 「常寂光土」の釈文から

智顛は『維摩経文疏』巻一で、四種浄土を解説するなか、「常寂光土」について

但真如仏性は、身にあらず土にあらずして、而も身と説き土と説く。

(続蔵二七・四三三左A)^{*}

※『正統蔵経』（中国仏教会影印正統蔵経刊行会）第二七卷・四三三左頁上段の意。

と述べる。この文を解釈して、湛然は『維摩経疏記』巻一に、次のように記す。

「但真」より下「の文」は、「身土二」（身と土は一なり）を明かす。細くこの意を思え。下の諸文および教門に明かす所の「浄」土の義に至りて、皆この意を以て往いてこれを申ぶるに、その理はまさに尽く。

(続蔵二八・三六三右A)

前述したように、法性土である「常寂光土」に居住する仏は、法身の「毘盧遮那仏」である。「真如仏性」という抽象的な真理そのものを浄土とする「常寂光土」には、有相の浄土も、有相の仏身も存在しない。真理と不二である純粹な智慧と慈悲がはたらく場を、仮に「常寂光土」（土）と呼び、その浄土の主宰者を仮に「毘盧遮那仏」（身）と名づけるのである。そのような「身」と「土」の関係を、湛然は「身土二」（身土不二）と表現している。ここでは、「身土二」（身土不二）という原理は、「常寂光土」に関することからとして語られるが、湛然はこの原理があらゆる浄土において成り立つものと見ている。^⑧

先にも引用したように、『維摩経略疏』巻一では「常寂光土」について、「但真如仏性は、身にあらず土にあらずして而も身土と説く。身を離れて土なく、土を離れて身なし。」と解説するが、これに対する智円の解釈をみてみよう。智円は『略疏垂裕記』巻一においてこの文に対して、

「但真」より下「の文」は、「依正不二」を顕す。(中略)既に「身を離れて土なし」と云う。身の成仏する時、土、豈に成「仏」せざらんや。既に「土を離れて身なし」と云う。「土、成仏す」と言うに何の乖背あらんや。

(大正・三八・七一九—A)

と注釈する。「依」(依法)とは浄土をいい、「正」(正法)とは身(仏身・衆生身)をいう。つまり、「依正不二」とは「身土不二」と同義である。さらに智円は「依正不二(身土不二)を根柢にして、「身の成仏」があるかぎり、「土の成仏」—環境世界の成仏—も認められるべきだと主張するのである。

(2) 『維摩経』 仏国品の文より

仏が無数の衆生に囲まれて説法する様子が、仏国品の序(通序)の末尾において、次のように描かれている。

彼の時、仏は無量百千の衆のために恭敬・圍繞せられて、「かれらの」為に法を説きたもう。譬えば須弥山王の大海に顕れたるが如し。

(大正二四・五三七—B)

ここでは、説法する仏の巍々たる姿を「大海にそびえ立つ須弥山(スメール山)」に譬えている。智顛の解釈によれば、ここに言う「仏」とは尊特身(報身)の仏であり、そのまま法身の「毘盧遮那仏」を表す。また、この説法の場は「常寂光土」を示しているという。智顛は『文疏』巻五において、問答体をもって次のように注釈する。

問うて曰く、何ぞまた「寂光浄土」を表すことを得んや。答えて曰く、此の経(維摩経)は既に「仏国」を以て宗と為す。既に浄智の法身(≡毘盧遮那仏)を表す、豈に即ち浄境の国土(≡常寂光土)を表さざらんや。法身は即ち浄土なれば、身を離れて別の土なく、土を離れて別の身なし。

(統藏二七・四六二右—A)

ここでは、「常寂光土」においては、その「浄土」と「法身」(毘盧遮那仏)とが不二一体であることが明かされる。更にこの文に対して、湛然の『疏記』巻上では

「身を離れて別の土なし」とは、此れ法身の「身土不二」の明文なり。

(続蔵二八・三六八右―B)

と記す。すなわち、智顛の所引の文が、「常寂光土」における「身土不二」の原理を明示したものであるとされる。また『略疏』巻二では、『文疏』巻五の文をうけて、「法身は即ち「淨」土なれば、身を離れて土なし。「淨」土は即ち法身なれば、土を離れて身なし。」(大正三八・五八三―A)と述べるが、これに対して智円は『略疏垂裕記』巻二において、

「法身」より下「の文」は、「身土不二」を顯す。「依正不二」に由るが故に、便ち身を現せば即ち国土を表す。

「身を離れて土なし」とは、荆溪(湛然)云わく、「此れは是れ、法身の身土不二の明文なり」と。(中略)請う、「略」疏の文および荆溪の意を觀よ。無情成仏、何の疑う所あらんや。且つ身を離れて土なく、土を離れて身なきが故に、身の成「仏」する時に、即ち土も成「仏」するなり。

(大正・三八・七三九―B)

と注釈している。智円も、湛然と同様に、所引の文が「身土不二」を表すものと解釈する。それに加えて、智円はここで「身土不二」(依正不二)を根拠として「土の成仏」を主張している。

(3) 『維摩經』「問疾品」の文より

「問疾品」(病氣見舞いの章)では、維摩と文殊菩薩の問答をとおして、大乘仏教の「空」の智慧や慈悲、菩薩行の本質などが論じられている。そのなかで、大乘の「解脱」(悟り)をめぐる、次のような問答が交わされる。

問う、諸仏の解脱は、まさに何においてか求むべき。答えて曰く、まさに一切衆生の心行中において求むべし。

(大正一四・五四四―C)

「心行」とは心の動きやたらきのことであり、「衆生の心行」とは、衆生の日常的な煩惱の心をいう。すなわち經文は、仏の究極の解脱(悟り)が、衆生の日常的な煩惱の心においてこそ求められ、成就されるべきことを示してい

る。『文疏』巻七では、この文に対して次のように解説する。

浄名じょうみやう（維摩）は「衆生の心行中より「仏の」果地の解脱を求む」と答う。此の經（維摩經）には「其の心淨ければ、則ち仏土も淨し」と云う。いま衆生の心行を觀「察」して、本性清淨の智に入り、衆生の心の源を窮むれば、即ち諸仏の解脱の果を顯すあらわ。

（統藏二八・一二右一B）

『維摩經』「仏国品」の淨土説は、簡潔に「心淨土淨」（心淨ければ土淨し）と表現される。すなわち、『維摩經』によれば、淨土とは、衆生と無關係にどこかに存在する空間のことではない。淨土は衆生の心の投影であり、衆生の心の淨らかさ（＝智慧の深さ）に応じて、それぞれ異なつた淨土が顯現される。引用文の「本性清淨の智に入る」や「諸仏の解脱の果を顯す」とは、衆生の「心淨」（心の淨らかさ）が極まり、仏と同等の智慧を得、同等の解脱（悟り）を得ることをいう。その「心淨」の極まりにおいて顯現される究極の淨土が「常寂光土」である。さらに『文疏』には、

もし「衆生の心淨ければ即ち仏土も淨し」を見れば、即ち衆生の心行において仏の三種の法身・解脱の不縱不横なるを（中略）見る。ゆえに至極の法身は、身を離れて土なく、土を離れて身なし。身土の理は同じ（身土理同）にして、義※（名）に異なりあり。（中略）或は毘盧遮那「仏」と名づけ、或は常寂光土と名づく。（同前）

※「義に異なりあり」の語句は、『略疏』では「名に異なりあり」と記される。

と説かれる。これによれば、「心淨土淨」の真意が体得されるとき、衆生の煩惱の心に即して、究極の法身と解脱が明らかになる。その究極の法身（毘盧遮那仏）のありようは、仏土（常寂光土）と不二一体である、という。そのような身と土の關係を、「身土理同」―仏の身と土とは、究極の道理において同一である―と述べている。

当該箇所『略疏』の文は、前に引用した『文疏』のそれとほぼ同一である。そこで更に『略疏垂裕記』の注釈文を見てみると、

「若見」（もし「衆生の……」を見れば）より下「の文」は、依正不二を明かす。（中略）「所以至極」（ゆえに至極の）より「名有異」（名に異なりあり）に至る「文」は、幸に冀がわくは後徳（後世の賢者）よ、細よしくこの文を読み、一心に遍く収めよ。ここにおいて無情成仏を曉あきらむべし。

（大正三八・八一七—A）

と記される。智円は「若見」以下の文が、「依正不二」（身土不二）を明かしたものであるとし、ここでも「身土不二」の考え方に依拠して、「無情成仏」（仏土の成仏）を強調している。

おわりに

以上、天台教学における「浄土」および「身土」について基本的な見方を述べ、それをふまえ「身土不二」の意義を検討した。その結果を次の四点にまとめておく。

①「身土不二」の「身」とは仏の身（仏身）、あるいは衆生の身をいい、一方「土」（居住の場）とは浄土のことであり、仏の土（仏土）および衆生の土をいう。「身」と「土」は、それぞれ単独には存在できず、両者は常に不離一体の関係にある。これを「身土不二」とよぶ。

②今回とりあげた中国天台の『維摩経』注釈書では、「身土不二」は、四種浄土のうち、とくに、浄土の究極的なあり方を示す「常寂光土」を説明する文脈において語られている。つまり「身土不二」とは、「常寂光土」において成りたつ仏身（毘盧遮那仏）と仏土（常寂光土）との融合的な関係（不二）を意味する。なお、宋代の孤山智円は「身土不二」の考え方を根拠にして、「土の成仏」（環境世界の成仏）を強調している。

③今回とりあげた『維摩経』注釈書のなかで、「身土不二」という用語が最初に現れるのは湛然の『維摩経疏記』においてである。天台智顛の著述（『維摩経玄疏』『維摩経文疏』）には、「身土不二」と同じ意味をもつ「依正不二」「身土理同」などの用語は記されるが、「身土不二」の用語は見られない。それに対して、湛然はとくに「身土不二

という語に注目していたようである。

④ 仏教という文脈のなかで考えれば、「身土不二」という語が、「地元で収穫された食べ物をたべると身体によく、他の地域の食料は健康を損なう」という意味で用いられることはありえない。なぜなら仏教思想としての「身土不二」は、本来きわめて宗教的な概念であるからだ。すなわち浄土（土）とは、そこに居住する衆生（身）の心の成熟と救済という目的のために、仏の智慧と慈悲の力によって建立されたものである。衆生の成熟―仏教の用語でいえば「機の成熟」―を離れて浄土の存在意義はない。「身土不二」とはまた、そのような「衆生」（身）と「浄土」（土）との宗教的な関係のありようを示す言葉である。

なお、「身土不二」（しんどふに）の正確な出典については、智顛の他の著述や智顛以前の中国仏教の諸著述、あるいは日本仏教の諸師の著述を精査する必要があるだろう。「身土不二」（しんどふじ）の出典ともあわせて今後の課題と考えたい。

註

- ① 櫻澤如一『石塚左玄』（伝記叢書一五八、大空社、一九九四）、序、五一頁、一二〇頁など。
- ② 山下惣一『身土不二の探究』（創森社、一九九八）、九九頁。
- ③ 智顛の著述の書誌的な解説については、佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九六一）、四一―六頁、また湛然の『維摩經疏記』については日比宣正『唐代天台学序説』（山喜房仏書林、一九六六）、三四七頁―などを参照されたい。
- ④ 『法華玄義』卷九、大正三三・七九四―B
- ⑤ 『維摩經玄疏』卷一、大正三八・五一九―A
- ⑥ 「火宅無常の世界」「煩惱具足の凡夫」の語句は共に『歎異抄』後序より。
- ⑦ 「『維摩經』仏国品の」文に云わく、所化の衆生に随つて仏土を取る。調伏する所の衆生に随つて仏土を取る。（中略）諸の衆生の、何の国を以て菩薩の根を起すべきに随うと。もし四「種浄」土に對せば、宛然として相い似たり（『略疏』卷一、

大正三八・五六五―A)。また『略疏』卷二では、この四文について詳細な解釈が述べられ、四種浄土との対応が示されている(大正三八・五八九―B、五九〇―B)。

⑧ 湛然の「十不二門」中の「依正不二門」参照。

⑨ 智円は『維摩経略疏垂裕記』の序において、「無情成仏」(土の成仏)についての謬見を正すことが本書執筆の理由の一つであると述べている(大正三八・七一―A参照)。また、「土の成仏」については、「一仏成道、觀見法界、草木国土、悉皆成仏」(一仏成道して法界を觀見するに、草木も国土も悉く皆成仏せり)という偈が有名であり、天台本覚論でしばしば取りあげられる。

⑩ 『維摩経略疏』卷一の「分文」(科文)の説明によれば、『維摩経』の序論(序分)は「仏国品」の偈頌の部分までである。

そのうち「彼の時、仏は……一切の諸來の大衆を蔽いたもう」までが「通序」であり、それ以降を「別序」とする。(大正三八・五六三頁参照)